

「氣多はふりの家」
ありうきに 息づく人も、
なしと思ふ。
能登の七尾に、
われは来てけり
（「春のことばれ」）
釈 遼空

国学院大学 令和5年9月20日(水) 定期号(毎月20日発行) 1部20円
【発行】国学院大学 【編集】総合企画部広報課 〒150-8440 東京都渋谷区東四丁目 【電話】03(5466)0130 【FAX】03(5466)0528

祭 儀 月次祭 10月2日(月) 午前10時 仮殿

研究
者
に
聞
く

人を惹きつけ、魅了してきた
神話の世界に迫る

神道文化学部・平藤喜久子教授

神話や神々、神社などを解説する一般向けの書籍の数々に、テレビ出演。いまやあちこちで引っぱりだこののが、平藤喜久子・神道文化学部教授だ。神社での御朱印集めや、漫画やアニメ・ゲームなどポップカルチャーでの神・神話表象の拡大など、裾野が広がる昨今だからこそ、先生の優しい語り口は注目を集めている。

そんな平藤教授の研究する「神話」の世界は、人を惹きつけ、魅了してきた。神話学という学問について平藤教授は、「さまざまな地域の神話を扱い、比較しながら神話を考えること」だという。「まったく別の地域の神話で、似ているものがあつたとき、片方の文化から他方の文化へ伝わったのか、偶然なのか、はたまた人間の心理や思考をめぐるある種の普遍性というレベルでの話なのかいろいろの見方ができる」と奥深さを語る。

平藤教授は大きな研究テーマとして2つを掲げる。1つ目は、「人は神や神話を、どんなふうに表示してきたのか」。文献や絵画など、その表現の仕方に、人が神や神話をどう受け止めてきたかが表れるという。2つ目は、「時代ごとの神話の語られ方」だ。人は神話を使って、自分の思想も含めていろんなことを語ろうとすることがあり、特に近代においてはその傾向が顕著になっているという。その語られ方を正確に把握しようとする研究を進める。

中面では、平藤教授に詳しく話を聞き、神話学の魅力や研究者としての姿に迫った。

4・5面に
関連記事

み
は
る
か
す
も
の

関東大震災が大正12（1923）年9月1日に発生してから100年を迎えた。この間、日本は、地震、台風、火山の噴火など数多くの災害に襲われていく▼大規模災害のたび、防災の重要性が叫ばれる。避難所への移動経路や家族間の連絡方法の確認、防災備蓄品の準備などが代表例だろうか▼災害直後は防災に意識が向いても、時間が経つほどその意識は薄れてしまう。だが、政府によれば、今後30年の間に首都直下型地震が発生する確率は70%。いつ起きても不思議ではない▼重要だと分かっているにもかかわらず、防災対策を継続することは意外と難しい。ならば、普段使いもできるもので

災害への備えを、という考えが注目されている▼寝袋にもなるクッション、椅子にもなるカバンなどのグッズが登場したり、キャンプ道具も災害時に活用できると注目されたりしている。備蓄食料も、一般的なレトルト食品を少し多めに買っておき、食べたら補充するといった具合だ▼平時と災害時を分けずに準備する―「備えない防災」や「フェーズフリー」というそうだ。この考えは、ほかでもない災害大国日本が発祥。東日本大震災を契機に提唱された▼災害への備えに対する考え方は時代と共に変化している。さまざまな情報や知恵もインターネットで簡単に知ることができる。関東大震災100年の節目、ほんの少しだけでも防災に目を向け、手軽にできることだけでも始めていきたい。



仮殿遷座祭 厳粛に斎行

仮殿遷座祭が9月11日に渋谷キャンパスで行われ、佐柳正三理事長や針本正行学長をはじめとする役員が参列した。

現在の神殿は、昭和5（1930）年に皇典講究所理事で実業界の重鎮でもあった和田豊治氏の寄付により建立された。今後、学校法人国学院大学創立140周年事業の一環として、渋谷キャンパスの御神域に明治神宮より譲り受けた御仮殿の材を用いて新たな神殿を造営するとともに、御神域の整備を行っていく。それに伴い、これまでの神殿はたまプラーザキャンパスへと移築し、歴史的建造物として保存する予定となっている。

仮殿遷座祭は、造替の工事を行うにあたり、御祭神に神殿から仮殿にお遷りいただく祭祀。仮殿を祓い清める仮殿清祓が行われた後、本学教職員、学生らの奉仕のもと、仮殿遷座祭が斎行された。斎主による祝詞奏上（しよくじ）の後、キャンパスの明かりを消灯し、浄閑（じようかん）（穢れのない暗闇）のなか、装束に身を包んだ奉仕者らが行列を組み、御祭神を神殿から仮殿へとお遷しした。

台風等で被災された皆さまへ

今夏の台風や豪雨などにより被災された皆さまに、衷心よりお見舞い申し上げます。
本学学生のご家族をはじめ、卒業生、関係者の皆さま、罹災者の方々の生活が一日も早く平常に復するよう、本学としてもできる限りの支援を行う所存です。

令和5年9月20日 国学院大学

博物館で『論語』の企画展 大学院生も展示協力



国学院大学博物館が7月15日から9月18日にかけ企画展「論語 for Beginners—『論語』と格闘した江戸時代—」を開催した。

今回の企画展では『論語』が江戸時代の日本で大きく流行した際に、初心者の学びを助けた学習参考書「訓蒙書」を紹介。『論語』本文の全てにふりがなを付した「傍訓本」や、『論語』の時代の制度や器具を図解した『四書引蒙略図解』など多様な訓蒙書が展示された。

大学院生の協力を得て名句に現代語訳とその意味を記したパネルも併せて展示。来館者たちは訓蒙書を頼りに論語に挑んだ江戸時代の人々の学びを追体験するかのよう、パネルを見て名句への理解を深めている様子だった。

国際交流送別会 留学生を学生らが送別



7月28日、渋谷キャンパス有栖川宮記念ホールでInternational Coffee Hourと国際交流送別会が併せて開催され、在学生や教職員たちが、K-STEPプログラムを終え帰国する13人の交換留学生らを送別した。

はじめに田原裕子国際交流推進部長（経済学部教授）が留学生たち一人一人に修了証を手渡した。留学生たちは笑顔で修了証を受け取った後、日本語を交えながら別れを惜しみつつあいさつ。最後に留学生と本学学生たちの思い出の写真をスライドショーで紹介すると涙する留学生もあり、本学で出会った友人たちとの再会を誓い合っていた。

須藤豊彦名誉教授逝去

国学院大学名誉教授の須藤豊彦氏が9月4日に逝去。87歳。

須藤氏は昭和10年生まれ。34年国学院大学文学部文学科卒。国学院大学短期大学兼任講師などを経て44年文学部兼任講師、48年専任講師、52年助教授、62年教授、平成18年定年退職、名誉教授。専門は日本文学、日本歌謡史。著書『日本民俗歌謡の研究』（平成5年、桜楓社）では日本歌謡学会が歌謡関係の優れた出版物に贈る第10回志田延義賞を受賞した。

渋谷移転100年を語る

第48回日本文化を知る講座

国学院大学研究開発推進機構が主催する第48回日本文化を知る講座「渋谷と国学院大学―校地移転100年を迎えて―」が7月15日、渋谷キャンパスで開催され、約160人が受講した。

第3講では、手塚雄太・文学部准教授が「渋谷区の誕生」について講演した。手塚准教授は、戦前の渋谷町、千駄ヶ谷町、代々幡町の人口推移や財政などを示しつつ、当時の状況を説明した。新聞記事なども取り上げ、「渋谷区の成立は、名称や統合の是非を巡り、地域間が対立するなど、一筋縄ではいかなかった」と渋谷区誕生の紆余曲折について語った。

第4講は、帝京大学講師・本学非常勤講師の高久舞氏が、「渋谷をそだてる若者文化」と題して講演した。高久講師は、「商業施設の開業をきっかけに、1970（80年代）に若者の街として確立、90年代に現在に続く文化の基盤が形成された」と語った。現在の渋谷は、「消費者ではない若者が集う場」に変化したとし、「消費拡大に向け『オトナの街』へと再開発が進んでいる」と変遷を語った。

法制・法学への関心は、草創の頃（1963）年に国学院大学に法学部が開設されてから60年目の節目の年にあたる。ただし、昨年創立140周年を迎えたことを考えると、開設60年は随分最近である感が否めない。この背景には、法学部設置に至るまでの苦難の道のりがあったわけ、この機会に本学における法学関連学部設置の歴史をさかのぼり、

法制・法学への関心は、草創の頃（1963）年に国学院大学に法学部が開設されてから60年目の節目の年にあたる。ただし、昨年創立140周年を迎えたことを考えると、開設60年は随分最近である感が否めない。この背景には、法学部設置に至るまでの苦難の道のりがあったわけ、この機会に本学における法学関連学部設置の歴史をさかのぼり、



移転の背景や渋谷での歩みを語った渡邊准教授

第1講では、渡邊卓・研究開発推進機構准教授が「『渋谷の岡に大学たてり』の100年」と題し登壇した。渡邊准教授は、はじめに本学の母体となった皇典講究所の創立背景や創成期の先人たちを紹介。移転の理由については、当時の教育政策や飯田町の発展に触れ、「学生も増加し、研究教育に適した静かな環境を求めた」と説明した。続いて、かつての校舎の写真や学生の様子を紹介しつつ、「関東大震災と戦禍の混乱を超え、渋谷の岡で100年の歴史を重ねてきた」と語った。

第2講は、院友（卒業生）で横



開設時の法学部教授陣

経学部から法学関係を一学部として分離・独立のうえ成立させたものであった。しかも、政経学部もまた政治学部から改組されたもの（昭和24年9月）であり、さらに政治学部にしてもわずから5ヵ月前に新設されたばかりであった。背景には、アジア・太平洋戦争終結後の再出発にあたり、当初法学部設置を構想するも実現には至らず、政治学部として設置認可を得たという事情（経済学抱き合わせの政治学部を設置し、漸次政経学部さらに法学部・経済学部へと発展させる計画）が存在した。とはいえ、これ以前の旧制時代

に法学専攻の学科開設が目指されなかったわけでは、決してない。大正12（1923）年に国法科の設置を試みるも頓挫したが、これは大正7年の拡張事業計画第二期の目玉として掲げられたものであったし、委員の清水澄（法学博士）は他大学・専門学校における英仏独の法律だけを講じる弊をみて、国法（わが国本来の法律）の学あるべきを提唱している。かくて国学院大学における国法科ないし法学部の設置は、まさに悲願というに相応しい。そして、その淵源は前述の明治23年の『國學院設立趣意書』に求められる。当時の皇典講究所所長・山田顕義（司法大臣）らは、学科目の大別として「政治・法制・文学」を据えることを目論んでおり、趣意書ではそうした素意を「この御国の制度・法律によりて国家組織の有様を知らしむべき法制学」と整えたのであった。

ちなみに、さらにさかのぼって皇典講究所の教科には「法令」が具わっており、すでに法制教授の実態のあったことを窺い知れる。この講義では、法制史料の読解による、法の制度と実態の歴史について学ばれていた。法制・法学への関心は、皇典講究所創立以来の伝統といつて過言ではない。

研究開発推進機構助教（特別専任） 比企貴之

学問ノ道

第53回

さかのぼり法学部史

第1回法学会講演会を開催



7月11日に今年度の第1回法学会講演会が渋谷キャンパスで開催された。

今回の講演会は「街の外に生きる『私』—地域生活定着支援センター相談員がよりそってきた人たち—」と題し、一般社団法人よりそいネットおおさか/大阪府地域生活定着支援センター相談員の前阪千賀子氏がオンラインで講演し、100人を超える学生が参加した。

今回は、犯罪・非行をした人のうち高齢や障がいにより福祉支援が必要な人を対象に支援を行ってきた前阪氏の講演を聞き「再犯防止」に向けた政策の法的問題を考えることを目的で開催。学生たちから具体的な支援方法などについて質問が寄せられた。

宇宙の学校
ミニロケット工作に挑戦

「たまプラーザ宇宙の学校2023」の第3回目が7月22日、たまプラーザキャンパスで行われ、親子40組がフィルムケースと人形用を再利用したミニロケット工作に挑戦した。

在学生からの説明やアドバイスを受けながら作り上げたロケットに水を注ぎ、発泡した人形用のガスでロケットが打ちあがると、子どもたちは歓声を上げていた。その後は、子どもたちが家庭で行った実験レポートを持ち寄り、発表しながらも自身で発表を行った。

最後に、校長を務める近藤良彦・人間開発学部教授が子どもたちへ修了証を授与した。

第29回「萬葉の花の会」
萬葉集の世界観にふれる

萬葉集を通して自然や文化に親しむ第29回「萬葉の花の会」が9月6日、たまプラーザキャンパスで開催された。

既に正明会長（本学名誉教授）による「萬葉の歌流れ」、大石泰次文学部教授による「萬葉集の祭り」、上野誠文学部教授（特別専任）と書家の眞清敬子氏による「秋風と萩」との3講演を行った。昼食時には、参加者が萬葉集に登場する食材を使った弁当を堪能するなど、萬葉集の世界観にふれた。

谷口教授は、平成29年から大



居家以岩陰遺跡 発掘10年目

縄文時代の重要遺跡で実習

国学院大学考古学研究室による「居家以岩陰遺跡」(群馬県長野原町)の発掘は、平成26年に開始されてから10年目を迎えた。同遺跡の発掘調査は谷口康浩文学部教授が率いており、今回は8月4日から9月22日まで実施。8月25日から9月3日には考古学実習として学部生と大学院生、約50人が発掘調査を行った。今回も数体の人骨や土器の破片、多数の動物の骨などの遺物が発見された。谷口教授は、同遺跡について、「約8000年前から1万年前の縄文早期の遺跡。地形や土壌の性質などの条件が重なり、数多くの人骨をはじめとした遺物が良好な状態で発見されており、全国的に見ても非常に貴重な遺跡」とその重要性を語る。

発掘調査は、平成29年から大谷を超えて考古学、人類学、DNA分析などの研究者が協力する共同研究プロジェクトとなっており、学際的な調査が進む。谷口教授によれば「人骨のDNA分析と埋葬関係など縄文人の社会組織を明らかにする組織的な研究に力を入れている。ほかにも、発見された動物の骨や植物の種子などの生活痕跡から縄文人の生活史を明らかにするといった研究も進んでいる」という。さらに、「人骨の埋葬場所や方法を明らかにし、縄文人は死者を『家』に弔い、死後を自分たちのすぐ側に埋葬するなどの社会性があったことがうかがえる。今後調査を進め、縄文人の起源や系統、縄文早期の社会、精神文化や生活様式などを総合的に解明していきたい」と語った。

今回の発掘に参加した福浦和輝さん(史2)は「学業を離れ、実際に発掘現場にいられて新鮮な気分。先輩からいろいろ教えてもらえるので勉強になる。遺物を見つけると、縄文人がどんな生活をしていったのか、かつてのかたちや思いが湧いてくる。また発掘さん(史2)は「動物の骨など非常に多く、取り上げる時には緊張しましたが、普段はショーケース越しでしか見られない遺物を、直接目に触れることもできる貴重な機会。来年もぜひ参加したい」と語った。

谷口教授は「最先端の研究に携わる現場での経験は学生にとって非常に貴重な。加えて、遺跡の発掘にはさまざまな夜間や膨大な作業があることも分かる。学年を超えた交流や協働作業も大切にしており、キャンパスを離れてこそその学びを得てほしい」と目を細めた。

人間開発学部 教育実践フォーラム
令和の日本型学校教育への理解深める

国学院大学人間開発学部教育実践総合センターが主催する第14回夏季教育実践「教育実践フォーラム」が7月30日、たまプラーザキャンパスで開催された。4年ぶりの対面開催となった当日は、400人を超える教育関係者が集い、先進的な事例発表など学びを深めた。

このフォーラムは、地域社会の教育の発展に寄与することを目的に学部開設当初から開催しており、今回のテーマは「令和の日本型学校教育」をテーマに、個別最適化を学びと実践的な学びの実現」を掲げた。はじめに太田直之学部長と近藤良彦学部長があいさつに立ち、開会の趣意を説明。続いて、田村孝雄学部長が今回のテーマでもある個別最適化を学びと実践的な学びの実現について、基調講演を行った。基調講演は対面に加え、オンラインでも配信され、全国各地からの視聴があった。田村教授は学習指導要領の改訂について、要旨やその方向性を解説。併せて、学校現場での先進的な事例なども取り上げつつ語った。

田村教授は、「子どもたち一人一人が目標を達成し、進捗すべきゴールを自覚し、自身の興味関心に沿って学びを進める。個別最適化を学びと実践的な学びの実現」と、他の子どもたちとの交流や振り返りなどお互いの知識が深まっていく「協働的な学び」の両輪が重要。2つの学びによって、子どもたちの「深い学び」の実現に繋がっていくと参加者に語りかけた。その後は、奨励小授給や音楽、体育・保健体育、道徳、特別活動、特別支援教育の6テーマに分かれて分科会が開催された。各分科会で先進的な取り組みを進める学校の教員や官公庁の専門家をゲストに招き、一部の分科会では、小学校などで実際に立つ同僚の卒業生も参加。それぞれの分科会では授業体験やグループワークなども行われ、積極的な交流が行われるなど盛況のうちに終了した。



田村教授による基調講演

人間と神話の関係を見つめる

「『神話学』が専門です」、とお伝えして、どんな学問なのか馴染みのある方は、あまり多くないかもしれません。神話という言葉やイメージは多くの方がご存じだと思うのですが、それを専門とする学問となると、いかがでしょうか。

実は学問の世界のなかでも、神話を研究する場合、日本でも西洋でもそれぞれの古典文学などの領域で研究されることがほとんどで、神話学の専門家は珍しいのです。

改めて、神話学とはどんな学問かという点、「いろんな地域の神話を比較する」ということが基本になります。

仮に、まったく別の地域の神話で、似ているものがあるとしたら、どうして似て

いるのだろうと考えると、片方の文化から他方の文化へ伝わったのか、偶然なのか、はたまた人間の心理や思考をめぐめる種の普遍性というレベルの話なのか、いろんな見方ができるわけですね。さまざまな神話を扱い、比較しながら神話を考えていくというのが神話学なのです。

私はその神話学の世界のなかでも、特に人間と神話の関係を考えていきたいと思っています。研究テーマは、大きくわけると2つです。1つ目は、

「人は神や神話を、どんなふうに表現してきたのか」ということ。これは文献のみならず、絵画などのビジュアルも含めます。その表現の仕方に、人間が神や神話をどう受け止めてきたのかが表れます。

2つ目は、時代ごとの神話の語り方です。人は神話を使って、自分の思想も含めていろんなことを語ろうとすることがあります。特に近代においては神話を使って思想を語る傾向が顕著になっていくだけでなく、政治的にも非常に難しい問題が絡んできます。そのあたりを正確に把握しようというのが、2つ目の研究の軸になっています。

研究に聞く

神や神話の表現を

探索することは、

世の中の神や神話の

捉え方を映し出す

神道文化学部教授 平藤喜久子

求められる宗教リテラシー

他方で、神話が「いま」という時代と直結するとき、その扱い方にはさまざまな留意が必要であることも事実です。神話が思わぬ利用のし方をされてしまったら、ある表現が意図せぬところで人を傷つけてしまったりすることがあります。

漫画やアニメ・ゲームなどのポップカルチャーにおいて、国内外の神々や神話が表現されてきていることは、非常に興味深いですし、面白い研究対象です。一方で、それが産業として海外に輸出されていくときに、日本の神々を自由に描く感覚のままに海外の神々を表現すると、思わぬ事態を招いてしまうことがあります。

例えば近年も、ある大人気アニメがイスラームのクルア

ーンを不適切にアニメ内で使用して問題になったり、ゲームのBGMに宗教的な音楽を使って製品が回収になったりというケースがあります。これは直接的に神や神話を表象したケースではありませんが、例えば他にもアプリゲームにおいて、海外神話の女神をモチーフにしたキャラクターの衣装があまりに肌の露出が過多、というケースは珍しくないでしょう。

ポップカルチャーというのは、日本国内での消費に収まるものではなく、グローバルに拡散していくものです。そうした状況のなか、自分たちが表現しているものが国際的な基準からどう見えるのかという視点——いわゆる「宗教リテラシー」は、やはり必要になってきます。

神や神話がポップカルチャーのなかでどんな表現されていること自体は、繰り返すようにとても面白いことで、一方でその神や神話の背後には、それらを信じてきた人たちが、大事にしてきた人たちが実際にいるということを忘れてはなりません。ポップカルチャーの表現というのは、そこに含まれた政治性が見えづらくなりがちなので、なおさら細心の注意が求められます。

ギリシャ神話も北欧神話も日本神話も、すべて開かれた文化資産であるわけですが、だからこそきちんとした知識を前提としつつ使ってもらえるよう、そして考えを深めていっただけのようにしたい。私の書籍などその一助となればと思っています。

時代と結びつく神や神話の表現

さて、1つ目のテーマである人が神や神話をどう表現してきたのかについては、例えば現代の漫画やアニメ・ゲームなどのポップカルチャーを例に挙げることができます。今の若い世代が神や神話をどう受け止めて、どんな距離感を築いているのかということ

は、こうしたポップカルチャーのなかで観察することができます。

実は私自身、2000年代半ばから大学で教壇に立つようになったとき、学生たちはこうしたカルチャーにおいて神話に触れているんだという点に衝撃を受けたんです。神や神話について話をする、それ、Fで見て

現代のお話をし、てきました。神や神話に、神話について留意すべきだと感じるもう一つのポイントは、歴史を遡るなかに見出されます。

私の研究テーマの一つに、かわるのですが、近代、特に昭和前期・ファシズム期において日本の神話研究がナショナリズムとどういう関係を持っていたのかという点に、関心を抱き続けています。例えば、三品彰英という研究者は、日本神話と朝鮮に象徴される北方系神話を「比較」するなかで、当時の植民地支配を正当化するような議論を展開しているんです。

神話を「比較」するとき、さらには自分の思想や自分が生きる時代に引きつけて語る場合はなおさら、対象に優劣をつけてはならない。このことを、私たちは常に意識すべきだと思います。

神話学という学問は元来、神話と神話を「比較」するという性質を持ちます。これは神話学の基礎を築いたマックス・ミュラーらが重視した視点であるわけですが、一方で

当時から「比較」が含みうる危うさを自覚した議論が積み重ねられてきました。神話学はヨーロッパで生まれた学問ですから、そこで行われる「比較」において、キリスト教が優れているのだという視点が前提とされてはいけません。優劣を語るための「比較」ではないのだという倫理が、神話学のスタート地点に刻まれているわけです。そもそも神話は、それぞれの文化や民族と強く結びつ

た」といった反応が返ってくるんです。

私はまったくポップカルチャーに詳しくなく、「FFって何……？」という状態で（笑）、そこから「ファイナルファンタジー」というゲームについて知っていくことになったのですが、今の神や神話の表現はこうした領域でなされているのだという発見がありました。

例えば、北欧神話に出てくる「オーディン」という神については、学生たちはFFにおけるキャラクターの一種として最初に接していたわけなんです。当時オーディンという神については、それこそ宗教学の先生も含めて日本ではほとんど知られていない状況だったにもかかわらず、

もちろん、学生たちがいるところの「オーディン」はどんな姿をしているのだろうと確かめると、私が知っている「オーディン」とは似て非なるものではあります（笑）。それでも、文献などを通して神話ではなく、こうしたゲームのビジュアルなどを通して、現代の人は神や神話に触れているんですね。

その表現のされ方に

き、また国の成り立ちなどを語っている場合が多い。だからこそ、「比較」が優劣の判断を伴うことがあつてはなりませんし、そうした危うい過去の議論や視点を現在に持ち込むこともまた、避けるべきでしょう。神話学の原点を忘れないようにしたいと思っています。

こうしたポイントをおさえながらであれば、やはり神話というものはとても楽しいものです。私もまた、現代の人々にとって神や神話ほどのように感じとられているのか、さらにはどう表現されるのか、興味が尽きません。

実は最近私は、「神話を感じる場所」を写真に撮る、ということに熱心に取り組んでいます。写真家の先生方に教えていただきつつ、出かけていって撮影するのがとても楽しいんです。

「神話を感じる場所」というのは、決して安易にスピリチュアルなことをいっているわけではありません。神話の舞台とされてきた場所が各地にあるわけですね。

例えば日本神話における天



ひらふじ・きくこ

国学院大学神道文化学部教授。博士（日本語日文学）。専門は神話学、宗教学。学習院大学大学院博士課程後期修了。著書に『聖なるもの』を撮る』（山川出版社、2023年）、『「神話」の歩き方』（集英社、2022年）、『神話でたどる日本の神々』（筑摩書房、2021年）、『世界の神様 解剖図鑑』（エクスナレッジ、2020年）など多数。

孫降臨の場所だと伝えられてきた地というものは、昔から人々がその場所に何を見てきたのかを考えさせる地でもある。実際に神に会ってはいないけれど、人々が「ここそが神話の舞台だ」と思ってきたことの理由が、きっとあるわけです。

ものすごく不思議な地形になっているとか、朝日が昇る様子があまりに綺麗であるとか、神話をまるで経験したかのように感じさせる理由には、いろいろなものがあるでしょう。私はそうした「神話を感じる場所」に赴きながら、「ああ、こういうふうに見えるものなんだ」という感覚を写真に収めたいと思っています。

もちろんまだ勉強の途中なのですが、これまで神や神話の表現を研究し、そこで発見を「書く」ことを学んだように、「撮る」ことを学んで、自分が感じたことを伝えてみたい。あるいはそうした行為自体が客観的に何を意味するのかを、また考えてみたいんです。

経済学部で課題解決型授業

7月10日に経済学部の2年次前期開講科目「ビジネスデザイン」のプレゼン決勝大会が開催された。この授業は企業などが実際に抱える課題を題材に、グループワークを中心に取り組む課題解決型（PBL）授業。今回は大手コーヒーチェーンの協力のもと「企業の魅力をさらに高め、集客力を伸ばす企画」という課題に学生たちが取り組んだ。4月からの授業で学生たちは、協力企業の商品やサービスの特徴などを知ることから始め、市場の調査・分析も実施し、協力企業の魅力を見

つけ出していった。その後は、教員やファシリテーター&アドバイザー（FA）の3年生の助言を受けながら、グループの提案を練り上げた。決勝には、全17チームでの予選を通過した6チームが進出。「Z世代」「40代女性」など対象を絞り、「スポーツジムでプロテインとコーヒーを使ったドリンクの提供」、「推し活需要を狙った店舗」など、さまざまな要素と協力企業の魅力を掛け合わせたビジネスモデルを提案した。協力企業や宮下雄治教授、辻和洋助教ら審査員と受講生らの投票の結



表彰チームの学生と審査員たち

果、地域住民の交流を促進する施策を行う店舗を地方に設け、人々が集う場所となる「コミュニティカフェ」を提案したチームが優勝した。宮下教授は、「この授業は、あるべき理想像を描きながら、現状の問

題はどこにあるのか、仲間と試行錯誤を重ねながらプランを精緻化していく。最終報告までの一連の活動を通して、社会課題へ強い関心を持ち、より良い未来社会のビジョンを描ける人材を育成したい」と語った。

インフォダイジェスト

- … 在学生
- … 保証人
- … 卒業生
- … 一般
- … 受験生
- 内容
- 日にち
- 時間
- 場所
- 対象
- 定員
- 料金
- 申し込み
- 問い合わせ

大学からのお知らせ

令和5年7月7日からの大雨による災害などで被害に遭われた皆さまへ

- 7月7日からの大雨や台風6・7・13号による災害などをはじめ、災害救助法が適用された地域に主たる家計支持者が居住し、家計の急変で今後の学業生活に支障をきたすおそれのある学生は、保証人（父母等）と相談のうえ下記の大学各窓口までご相談ください。適用対象地域は本学HPや内閣府防災HPで確認してください。
- ▶ 学生生活課（☎03・5466・0145）
▶ たまプラーザ事務課（☎045・904・7714）
▶ 大学院事務課（☎03・5466・0142）

法学会学生懸賞論文を募集

- 法学部生を対象に、法律学・政治学に関するテーマで懸賞論文を募集します。優秀な論文は表彰を行い「懸賞論文入選集」に掲載します。併せて副賞（最優秀賞：図書カード10万円分、優秀賞：同5万円分、佳作：同3万円分）を贈ります。
- 令和6年1月22日(月)午後3時までに論文（A4判用紙40字×30行の横書き。脚注含め10～40枚）と

受付票、論文概要をWord形式で作成し、法学会懸賞論文窓口にメールで提出。詳細は本学HP（二次元コード）で確認を。



法学会懸賞論文窓口
(law-kensyo@kokugakuin.ac.jp)

第7回「渋谷区長への施策提言コンペ」の参加者を募集します

- 本学では渋谷区と連携し、学生ならではの施策提言を行っています。7回目となる今回のテーマは「①未来のまちづくりに必要なこと」「②地域コミュニティの維持と活性化のためにできること」です。発表では学生の皆さんから直接、長谷部健区長へ提言を行い、ご意見をいただきます。応募方法などの詳細は本学HP（二次元コード）で確認を。
- 【発表】10月25日(水)に10分間のプレゼンテーション。応募多数の場合は選考を行う場合あり。
- 【表彰】区長賞、学長賞（各賞金5万円）ほか
- ▶ 本学の学部生、大学院生
▶ 9月29日(金)までにエントリー
▶ エクステンション事業課
(☎03・5466・0769、
jigyuu@kokugakuin.ac.jp)



キャリアサポート

※詳細確認・申し込みはK-SMAPYⅡから行ってください

企業セミナー

- 各業界のリーディングカンパニーの採用担当者が、業界や企業の説明をします。この機会に志望する企業や業界への理解を深めましょう。志望業界が定まっていらない人は、まず企業の話聞いて興味・関心の幅を広げていきましょう。
- 9月25日(月)～10月31日(火)、11月8日(水)～10日(金)
- 1～3年生

第2回求人フェア

- この時期の採用は、選考のスピードが速いことが特徴です。皆さんの就活状況に応じた情報提供、個人面談も実施いたします。
- 10月4日(水)
- 4年生

博物館

料無料
時10時～18時(最終入館17時30分)。祝日を除く月曜休館
※博物館関連イベントの問い合わせは☎03・5466・0359

特別展「三嶋の神のモノガタリ ―焼き出された伊豆の島々―

- 伊豆諸島・半島は、火山帯に由来する厳しくも豊かな自然環境に恵まれ、古代の人々は自然現象である噴火と造島に神々のはたらきを見出しました。そうした神々の神業は、古代国家により重視され、中世以降も神仏関係の高まりの中で、島々の創成を語る説話・縁起として流布されて今日に至っています。一方で、三嶋神は源頼朝以来、武士の守護神としても崇敬され、各地へとその信仰は広まりをみせていきました。伊豆半島ユネスコ世界ジオパーク認定5周年を記念した本展示は、大場磐雄博士より本学が伝統的に取り組んできた研究課題である伊豆三嶋信仰を、自然科学的な知見及び神道学的・考古学的な観点から、資料を通じて捉え直し、展示・公開することを目的としています。
- 9月23日(土・祝)～11月19日(日)
- 博物館企画展示室

イベント

令和5年度 ホームカミングデー

- 院友（本学卒業生）やそのご家族の方に、母校へ集い親睦を深めていただくホームカミングデーを今年も開催します。
- 針本正行学長をはじめとする研究者による特別講演、出雲駅伝のパブリックビューイングや物産展など、1日通してお楽しみいただけます。一部企画を除き、在学生、一般の方も参加可能です。ぜひ国学院大学へお越しください。申込方法や企画の詳細は、特設HP（二次元コード）で確認を。
- 10月9日(月・祝)
- 渋谷キャンパス
- ▶ 卒業生とそのご家族、在学生、一般の方
- ▶ 特設HP（二次元コード）で事前登録
- 料無料
- ▶ 校友課（☎03・5466・0787、
hcd@kokugakuin.ac.jp）



第8回 地域交流スポーツフェスティバル

- 日頃気になる健康指標、楽しみながら測定してみませんか？ 体力測定、骨密度測定、体組成測定など

を無償で体験することができるほか、体験する機会の少ないスポーツや未就学児対象のアスレックススペースなど、体を動かすコーナーも充実しています。お子様から高齢の方まで幅広い年代の方々に楽しみながら「見える健康」を提供します！

- 10月15日(日)10時～15時
- たまプラーザキャンパス
- ▶ 年齢不問
- 料無料
- ▶ 本学HP（二次元コード）から申し込み
- ▶ 人間開発学部地域ヘルスプロモーションセンター
(kchpc@kokugakuin.ac.jp)



第14回 共育フェスティバル

- 地域子どもたちへ学び、遊び、体験を通じて楽しんでもらう共育フェスティバルを開催します。絵本のお話し会や身近な材料を使ったおもちゃ作り、コンサート、実験・工作体験など16企画でお待ちしております！詳細や参加にあたっての注意事項は大学HP（二次元コード）でご確認下さい。
- 10月29日(日)10時～15時
- たまプラーザキャンパス
- 料無料
- ▶ 当日受付
- ▶ たまプラーザ事務課（☎045・904・7700）





文化財を守りたい 考古学実習を将来の糧に

日野優太郎さん（史学科2年）

国学院大学考古学研究室が平成21年から発掘調査を続ける長野県安曇野市の穂高古墳群で、8月の3連休を含む10日間にわたって史学科考古学コースの考古学実習が行われた。青木敬・文学部教授（歴史考古学）が指導する中、32人が同古墳群に属するE6号墳を調査した。

本学考古学実習は、学生が発掘を主導し最終的に報告書をまとめ上げるのが特色で、「研究の道に進む学生にとって有意義」（青木教授）という。

学生は事前に考古学調査法の履修や学生同士の研究会で発掘技法や先行研究などの基礎を身につけてから現地入り。大学院博士課程前期2年生から学部1年生までが同時に現場へ入る。作業の統括、測量や図版の作成など経験が必要なのは上級生が担当、遺物の可能性のあるものが出るたびに確認を求める下級生の姿も見受けられ、「国学院考古学」が伝承されている様子もうかがえる。

日野優太郎さん（史2）も考古学への熱意が高じて1年生から実習に参加した一人。「実習は複数年参加できる。早く参加すればそれだけ経験を

積んで多くを学べると思った」と語る。「小学生の時に城郭に興味を持ったのが歴史研究に足を踏み入れたきっかけ」というが、「自宅の近くに小弓城という城があったことを知って調べかけたが、廃城となって姿を消している上に古文書などの史料もなく途方に暮れた」という。そんな時に会ったのが発掘調査の報告書で、「城が消えても考古学によって蘇らせることが可能」と気付かされた。「中学生の時には『志望先は国学院大学の史学科考古学コース』と書いていた」と笑う。

2度目の現場入りとなった今回、日野さんは初めて遺物も掘り出した。「須恵器の甕の一部のようなだが、出てきた時には『ウワッ！ 出た！』と興奮した。後からいくつかは遺物ではないことが分かったので、もっと見る目を養いたい」と振り返る。また、「本当は掘りたいが」と言いながらも主に測量などを受け持ち、現場初体験の同級生や1年生からの質問にもてきばきと対応している。

「実習は、大学院生やティーチングアシスタン

トを務める先輩が責任をもって調査区を担当するシステムだが、下級生も学年が進めば責任ある立場を任されるので、先輩から学びながら後輩たちに受け継ぐことが大切だ。授業で単位を取ったら終わりではなく、国学院考古学の伝統を繋いでいくということ。フィールドだけではなくあらゆる場面で継承していくことが考古学調査法と実習のメイン」と日野さんは思いを込める。

しかし、考古学へと誘ってくれた小弓城思うと複雑。「調べようと思った時に姿を消していた無念さを繰り返させないためにも、文化財を守っていきたくと思った。どんな仕事でもいいので、文化財を残すためにひと足掻きできる人間になりたい」と語る。

日野さんは「発掘調査は掘って終わりではない。遺物の整理や分析が控えている。計画から発掘、報告書作成まで一連でできる大学は少ない。だからこそ、国学院を選んだし、この実習を将来の自分の糧にしたい」と充実した表情を見せた。

前号で述べたように、欧米の「つくる」文化に対して、日本は「（自ら）なす」文化です。

「他」を「自己」との対峙と見る欧米の「狩猟文化」に対して、日本は、「他」と「自己」を包括的に捉える「稲作文化」と総括されます。

それは、我が国の子育てにおける「しつけ」の語源にもなっています。

田植えの季節に入ると、地方では今日でも古老は、「そろそろしつけ時だな」という言葉を交わします。

実は、我が国の子育ては、早苗を本田に移す田植え、すなわち「しつけ」に象徴されるのです。

今、「実りの秋」ですが、我が国には「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という格言があります。一般には、「偉くなくても、頭を低くして謙虚に生きるべき」という処世訓ととらえられてもいます。

しかし、その真意は、社会的自立や精神的自律の尊さを促す子育てに関する格言でもあります。

何故、頭を垂れるのか。

それは、茎がしっかりとまっすぐ立っているからであり、子育てにおける「なる」の成果なのです。

「外」から手をかけ「つくろう」としても、本人自身が「なろう」としない以上、いくら「外」から持ち上げようとしても、稲穂の頭は垂れることができません。地べたに、はいつくばかりです。

今年の夏の全国高校野球選手権大会では、慶応高校野球部の自由を重んじる「エンジョイ野球」が話題になりました。実は、慶応義塾大学創設者・福沢諭吉も、「education」を「教育」ではなく「開発」と訳した人物です。

したがって、その系譜を辿れば本学の「修理固成」に行きつくのです。

同じく、我が国の「なる」子育てを象徴する言葉の一つに、「啐啄同時」という禅宗由来の格言があります。これは、鳥の雛が孵化する時に卵の殻をついて音を立てるのと、それを聞きつけた母鳥がすかさず外から殻をつついて殻を破る手伝いをするのが同時に

「修理固成」の子育てとは 我が国古来の子育て



名誉教授 新富 康央

しんとみ・やすひさ
学校法人国学院大学特別参事。
人間開発学部初代学部長、専門
は教育社会学、人間発達学。新し
い時代の子育て論には定評。



柔道部

各大会で好成績 12選手が体重別全国大会へ

国学院大学柔道部が7月から9月の各大会で活躍し好成績を収めた。

7月9日に東京武道館で東京ジュニア体重別選手権大会が開催され、男子90kg級で中村俊太選手（健体3）が優勝を果たし、同66kg級で猪瀬真司選手（健体2）が準優勝、坪井蓮矢選手（史1）が3位、同81kg級で林健成選手（健体1）が3位、同100kg級で清水雄護選手（経2）が準優勝とそれぞれ表彰台に上がった。5選手と今季ジュニア国際大会で優勝している66kg級の羽田野啓太選手（健体3）、73kg級の後藤颯太選手（健体2）を加えた7人は、9月10、11日に埼玉県立武道館で行われた全日本ジュニア体重別

選手権大会に出場。羽田野選手と中村選手が準優勝、猪瀬選手と清水選手が3位となった。この結果、羽田野選手は10月にポルトガルで開催される世界ジュニア大会の日本代表に選出された。

9月3日には、男子42回・女子39回東京学生柔道体重別選手権が東京武道館で開催され、男子60kg級で田中祥選手（経営4）、同90kg級で中村選手が準優勝。同60kg級で宮部真臣選手（観まち2）、同73kg級で阿久津友春選手（法3）が3位となった。この大会は全国大会の予選を兼ねており、4選手のほかに7選手が出場権を獲得。昨年度全国大会優勝の後藤選手を加えた12選手が体重別日本一に挑む。



東京学生柔道体重別選手権で入賞した阿久津、田中、宮部、中村選手（左から）

陸上競技部

駅伝シーズンに向け好記録

ホクレン・ディスタンスチャレンジの第3戦網走大会が7月8日、網走市宮陸上競技場（北海道）で開催され、平林清澄選手（経営3）が10000mで、山本歩夢選手（健体3）が5000mで本学記録を更新。10月の出雲駅伝から始まる駅伝シーズンを前に、チームを勢いづけた。

平林選手は、外国人選手や実業団選手らが多数出場するなか記録に挑んだ。ハイペースでレースは進み、

平林選手は日本人先頭集団に位置する積極さを見せる。6000mからは実業団選手を従え外国人選手を追走。8000m過ぎからは日本人先頭争いを繰り広げ、最後は日本人2番手の8着となり27分55秒15でゴール。藤木宏太選手（令4卒・130期神文、旭化成）が令和3年に出した28分10秒30を更新する本学新記録を樹立した。

山本選手も多くの強豪選手が集う

最終組に出走。第2集団に位置すると、3000mを8分11秒で通過。先頭集団から離れた選手たちを追い抜きつつ、前に行く選手を必死に追走。日本人3番手となる5着でゴールを駆け抜けた。山本選手は13分34秒85と自己記録を10秒以上更新し、中西大翔選手（令5卒・131期健体、旭化成）が昨年の同大会で記録した13分38秒45を上回る本学新記録をマークした。



10000m新記録の平林選手（©月刊陸上競技）

卓球部

牧野選手が銀メダル 世界ろう者ユース選手権

第1回世界ろう者ユース卓球選手権大会が7月9日から12日に台湾の台北市で開催され、国学院大学卓球部の牧野陽菜選手（中文1）が日本代表として出場。女子ダブルスで銀メダルを獲得する活躍を見せた。

この大会は12～19歳の聴覚障がい者が参加する世界大会で、今回が初開催。牧野選手は2月の大会結果から日本代表

に選出されていた。女子ダブルスの決勝は、5ペアによる総当たり戦で実施。牧野選手ペアは各国代表との対戦に臨むと、4試合中3試合を3－0で勝利。金メダルとなったウクライナ代表ペアには0－3と惜しくも敗れたものの、初の世界大会ながら見事に銀メダルを獲得した。牧野選手は女子シングルスと混合ダブルスにも出場し、それぞれベスト8に進出。各国代表と渡りあった。

試合後、牧野選手は「世界一を狙って練習を重ねてきたので、あと一步届かなかった悔しさが大きい」と振り返った。令和7年にはデフリンピックの東京開催が控えている。牧野選手は「日本開催なので、これまでお世話になった家族や部活の仲間たちにも試合を見てもらえる。恩返しには最高の舞台なので、日本代表になってメダルを獲り晴れの舞台にしたい」と意気込みを語った。



見事銀メダルの牧野選手

硬式野球部

秋季リーグ 愛媛で開幕戦



国学院大学硬式野球部が所属する東都大学野球1部の秋季リーグが開幕を迎えた。昨年度の春季リーグから開幕戦は地方開催が行われており、今回は愛媛県の坊ちゃんスタジアム（松山市）を舞台に熱戦の幕が上がった。9月2、3日に行われた初戦では、日本大学と対戦。2日の第1戦は0－2とリードされた六回裏、加藤洋平選手（健体4＝写真）、田中大貴選手（同3）の安打などで1点を返すも追い上げ及ばず1－3となり、第2戦も0－1と惜しくも敗れた。当日は、本学卒業生で組織する国学院大学院友会の愛媛県支部も駆け付け、スタンドから同部選手たちの奮戦に大きな声援を送った。